

と、真剣しんけんな顔でいいました。

「たとえ父上に殺されても、私は父上やあなたがたのために神に祈り、神にお願いします。そうした信仰しんこうが、この海老名家えびなけのためにも、この世の中のためにも大切なことなのです。」

と言つて、リンもまた、信仰についての自分の考えを変えませんでした。宗教の問題ではその後家の中でたびたび争いがありました。

東京にいること六年、リンは四十五歳となり、ふるさを思う気持ちが強まってきました。

「若松に帰ろう。若松に帰つて幼稚園ようちえんや女学校をつくらう。」

リンは夫の季昌すえまさに相談し協力きょうりょくを願いました。季昌も、自分を重く用いてくれた三島通庸しみまみちつねがなくなつて、そのころは警視庁けいしつちやうをやめていたので、会津若松に帰ることに賛成さんせいしてくれました。